

---

# たいせん

山先 進

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たいせん

### 【Nコード】

N7747Y

### 【作者名】

山先 進

### 【あらすじ】

某ゲームの二次です。一応ネタバレになるのかな？

懐にスッポリと収まってしまっ、華奢な身体。

「ンッ、クフッ……」

膝の上で軽々と、上下に揺さ振ることが出来る。

「ウクッ、ハウッ……」

有るか無きかの控え目な胸が、シットリ汗ばみ、俺の胸と密着する。

「ボク、ボクもう……」

育っていない青い小尻を掴み、興奮に指を食いこました。

「ゴ、ゴメンナサイ。

もう、ゆるして……」

細い腕を、継り付くかのように俺の首に廻し、暴れる身体を支える。

「そんな！ダメ。

ダメだよお」

幼いソコは、キツく締めつけながらも、溢れ出す快感の雫で滑らかな動きを助ける。

「アアッ！隊長っ……」

「クッ！」

彼女の絶頂の悲鳴と同時に、俺も熱い塊を、狭い隙間に撃ち込んだ。

ハアハア……。

荒い息をつきながら、グツタリと力を落とす彼女。

汗で額に張り付いた、繊細な銀髪が色つぽい。

凄まじい陶酔感と戦いながらも、放出後の覚醒脳が、己が行為を苛む。

「俺は、俺は何故……」

部隊の皆で慰安旅行に来た。

隊長の俺以外、ほとんど少女という特殊な部隊。

幾度の試練を乗り越え、今では強い結束を保てるようになっていた。

昼間、海で楽しく遊び、夜は宴会でおおいに盛り上がる。

夜もふけて、皆は、疲れて寝てしまったようだ。

妙に興奮が残り、目がさえた俺は、ふと思いつき、大浴場へ繰り出す。

貸し切りの宿。

俺以外、皆隊員。

つまり、ほとんど女だ。

大浴場は混浴だから、かちあつたら洒落にならない。

だが、今なら……。

「おお、絶景だなあ」

月明かりに照らされた、海を望む大浴場。

値千金の光景を満喫する。

「これを一人占めなんて、罰が当たりそうだ」

「当たらない。

一人じゃないから」

俺の呟きに、ツツコミが入った。

「君か？」

隊員の一人が、チンマリと湯に浸かっている。

一瞬焦ったが、この子は唯一の例外だった。

「よかった。

他の連中なら、ヤバかったよ」

安堵しながら、俺も湯に入る。

この子は、一時、部隊から離れていた俺の再着任と共に、補充された新隊員だ。

寡黙な独逸人。

美しいシルバーブロンドの短髪に、澄み通るようなブルーアイ。

白磁器を思わせる肌と、スレンダーな肢体。

まだ幼ささえ残す歳だが、無表情で無感心、感情が無いのと思

えるほど、冷静沈着。

それが彼だ。

そう、彼。

俺以外、唯一の男の隊員。

まだ、男と言うより、少年だが……。

なににせよ、ほっとした。

この子なら、むしろよい機会だ。

男同士、裸で親交を深めよう。

手ぬぐいを頭に、並んでお湯につかる。

「隊には慣れたかい」

さりげなく、常套句から会話を始めてみた。

「問題ない。

隊に置けるポジションを認識し、自らの役割を果たしている」

『……かたい』

どうも、この子は堅すぎるくらいがある。

自由奔放を絵に描いたような他の隊員の中だと、それはいつそう際立った。

軍人としては好ましくはあるが、人として問題があるように感じるほど……。

サパツ……。

悩む俺を尻目に、彼は湯舟から立ち上がる。

「オ、オイ。」

もう出るのかい」

あっさり出ていく彼に、声をかけたが。

ストツ。

洗い場に腰掛けた。

体を洗うようだ。

よし！

「背中を流してやるよ」

俺も湯から出て、彼に続く。

「必要ない。」

自分で出来る」

アツサリ断られるが、その返事は想定済み。

「いや、実は俺も流して欲しいんだ。

日焼けが痛いんだが、力加減が難しくって  
上手く言い訳になるか？

「了承した。掃布を手伝う」

「ありがとう。じゃあ先にお返しだ」

立ち上がりかけた彼を強引に座らせ、背中に廻った。

「隊長……、いいよ」

まだ抗うが、ここは強引に行く。

「遠慮は無しだ。」

そのかわり、俺にも宜しく頼む」

そう言つて肩を抑えると、彼は大人しく座り直した。

これだけでも、エライ進歩だ。

昔は、背後に廻っただけで、無条件に投げ飛ばされたものだ。

思い出しながら、丁寧に背中を流し始めた。

しかし……

『華奢だなあ』

この子の背中は、想像以上に小さい。

部隊の中でも、屈指の力量を誇る彼だが、こうして見ると、まだまだ子供の体だ。

一体、どのような人生を歩んで来たんだろう。

近くで観察すると、きめ細かい肌に無数の傷跡が残っている。

『この子も、辛い過去を過ごしてきたのだろうか……』

ほとんど、間違いないだろう。

隊員たちは皆、大きな力と共に、厄介な災厄に見舞われてきた。恐らく、この子にも……。

「……隊長？」

黙り込んだ俺を不審に思ったか、不意に、彼が話し掛けてきた。

「イヤ、何でもない」

そうだ。

過去に同情したつて、意味が無い。

大事なのは、これからを、どう生きるかだ。

それならば俺も、少しは力になれる。

気合を入れなおし、思考に止まっていた手を再度、忙しく動かし始めた。

ゴシゴシ……。

サイズの制約上、割とアツサリ終わってしまう。もうちょっと、コミュニケーションを取りたい。

『……まあいいか』

士官学校で、背中流しは手慣れたものだ。だが、前まで流す事は、流石になかった。

しかし、甥っ子なんかは、全部洗ってやってたじゃないか。子供扱いは嫌がるかもしれんが……。

背中から前に廻り、座り直す。

手を伸ばしても嫌がる様子はなかった。

「もうちょっと、育たないとなあ」

軽口を叩きながら、胸に手をやる。

フヨン。

『……ん？』

微妙な手応え。

引き締まった他の部位とは、異質の柔らかさ。まるで……。

「イヤ、まさか……」

そんなことはない。

失礼にもほどがある。

邪念を払って、手を動かす。

うっすら膨らんで見えるのは、気のせいだ。

乳首なんて、男にもある。



ちつとも、女の子っぽくなんかない。

柔らかい肩の丸みや、細い首筋が、色っぽく見えたりしない。  
だいたい、見てみる。

このペタンコな、お腹の下には……。

アワで見えないダケ。

まだ子供だから、小さいダケ。

無いはず……

「無いっ！！！」

驚きに飛びのく俺。

意味も解らず、反射的に距離をとろうと……。

しかし、無茶な機動で、足元が疎かになる。

ズルツ、ガンツ！！

日ごろの鍛錬も、なんのその。

足を滑らしブサマに転倒。

頭部を強打し、アツサリ意識を手放した。

まるで、逃避するかのよう……。。

ピチャ、ピチャ……。

『……………ん、ウンッ』

何か、こう、気持ちいい。

ボケた意識の中、奇妙な快感を感じる。

クチュ、キュムツ……。

周り中女性、しかも、すこぶる付きの魅力的な女の子達に囲まれた環境的に、常に刺激されてはいるが、立场上、解放する訳にはいかない欲望。

意識と共に手放した理性が、抑えることも放棄して、その快楽を貪る。

チュツ、チュクツ……。

瞳に写る光景。

だらし無く寝そべる俺の足元、……って言うか、股間の辺りに小さな頭。

繊細な銀髪が、小刻みに揺れている。

その表情は、ここからは見えない。

真っ白な背中が滑らかに続き、育ってない尖った尻が、向こうに見える隠れする。

チンマリと、うずくまる様な姿勢が愛らしい。

クチュ、チュプツ……。

高まりと共に、熱いものが込み上げ、腰から降り落ち、先端に向かう。

パンパンに膨れ上がった内からの圧力が、激しく崩壊を求めた。

そして、

「ウウッ！」  
ド。ド。ド。ド。ド。ド。ド。ド。

爆発した。

噴出する白濁液が、幼ささえ残る整った美貌に噴きかかる。

汚れるのも構わず、その小さな口で、暴れる欲棒をくわえなおす少女。

俺はいぎたなく楽しみながら、最後の一滴まで、彼女の口中に搾り出した。

ハアハア……。

長い至福の夢から覚めて、ようやく現実に向き合う。

俺の股間に、小さくうずくまる彼女。

目の前の美しくも幼い少女は、口中の汚汁を飲み下し、なおかつ、俺の醜い欲棒を清めるように、

その、愛らしい舌を這わせていた。

「な、何を……」

何が『何を』だろう。

状況は一目瞭然。

俺は、部下である少女を犯したのだ。

知らなかった。

この子が女の子だと。

だから、風呂に入り、身体を流した。

意識がなかった。

その間に、性欲を掻き立てられ、射精に到った。

言い訳にもならない。

司令からお預かりした、大切な隊員。  
いや、それ以前に、嫁入り前の女の子に……。

洗い場の剃刀を手にした。

一刻でも早く、ケリを着けねば。

それに、俺にはこれが相応しい。

我が愛刀すら、こんな奴に使われたくないだろう。

切り口さえつけば、後は素手ではらわたを引きずり出しても……  
正座し、逆手で腹に当てる。

一息に切り裂く為、気を入れた瞬間

「……僕じゃダメなんだね」

少女の絶望が叩きつけられた。

恥辱が、身体を燃やす。

最も傷付けた相手の事も考えず、ただ自分の見栄のために逃げよう  
とは……。

まず、すべき事は

ガッン！

「すまない。こんなことをしでかして……」

石造りの床に、頭を叩きつけての土下座。

ガツガツと、二度、三度とぶつける。

自傷行為に、酔いしれた。

しかし……

ギョッ。

「止めて。隊長」

詫びの対象に、抑えられる。

頭を胸元に、しっかりと抱えられて……。

やはり、生きている資格はないようだ。

このような状況に置いて、少女の胸元の柔らかさを感じる俺には……。

「……ごめんなさい」

しかし、謝罪の言葉を発したのは、少女の方だった。

「気分を害する様なことをして。」

少しでも隊長に、気持ち良くなって貰いたかったから……。」

「なっ？」

何を？

確かに、行為をしていたのは彼女だが……。

いや、そんなまさか。

よこしまな考えを持った俺が、強制したに決まっている。

頭を打って、混乱した記憶の中から、自分を否定する証拠を必死に手繰った。

「気持ち悪いよね。こんな人形に触れられても」

何時も通りの堅い口調で、彼女は言う。

「でも、ボクの穴だけは、気持ちいいって言われたから。実験動物でも、使える所はあるって誉められたから……。」

な……にを……。

淡々と紡ぎだされる言葉を理解できぬまま、只、呆然と耳に入れた。凍りつく俺から、不意に離れる少女。

「こうすればいい？」

人形の目は気持ち悪いから、こうしてろって人もいたよ」「四つん這いになり、小振りな尻を向ける。

立てた膝を開き、そのまま、白魚の様な指で、幼い性器をこじ開けた。

透き通る白い肌に、鋭利な刃物で一筋入れただけの様なソコが、強引に開かれ晒される。

内臓を思わせる紅い粘膜が、テラテラと光っていた。

「それとも、コッチがいい？」

両手をずらし、薄い尻たぶを割り開く。

その用途とは裏腹に愛らしい器官が、剥き出しになった。

「便は付いてないでしょ。」

今も、研究所で言われた通り、常に洗浄しているから」

針の先も通らない様に、締まっていたすぼまりが、今はポツカリと開き、中まで覗かせる。

清らかな少女の肢体に隠された、俗にして卑猥な器官が、瞳に焼きつく

その衝撃に、全身が凍りついたかのように動かない。

そのまま、長いような一瞬のような時間が過ぎ去った。

「どうしたの？隊長」

微動だに出来なかつた俺に、ようやく姿勢を崩した少女が向き直り、四つんばいのままジリジリと、

こちらに這い寄ってくる。

いつものポーカーフェイスが崩れ、すがりつくような表情。

脅えに蒼白だが、どこか空虚な雰囲気混ざっていた。

「…………どっちもイヤ？  
じゃあ、また口を使う？  
ボク、今度は上手にするか…………」  
常に冷静な彼女が、わずかに見せる感情。  
哀訴と媚びの、入り交じった…………。

ギョツ。

これ以上聞きたくない。  
押さえ付ける様に、懐に納める。

たまらなかった。

こんなことを強いられながら、それでも俺を気遣う優しさが…………。  
悲しかった。

こんなことを平然とこなす彼女が…………。  
悔しかった。

こんな幼い少女に、このような諸行を押し付けたケダモノの存在が…………。  
…………。

苦しかった。

それでも彼女を求めてしまう、己の醜さが…………。

俺は彼女を抱いた。

「俺は、俺は何故…………」

溜まりきった欲望を噴出させ、ようやく、取り戻した理性で俺は、

意味のない自問に逃げた。

軍人として。

上官として。

年長者として。

人として。

漢として……。

全てを裏切り、少女を汚した。

吐き気をもよおす獣の所行。

それでもなお、彼女のなかから、出ていく事すら出来ない、鬼畜以下の自分。

「……いちよう、隊長。」

どうしたの？隊長」

自己嫌悪の盾を貫く、彼女の気遣いが痛い。

だからただ、縋り付くように、ひざの上の少女を抱きしめ続けた。  
華奢な身体を力一杯。

「あの、隊長。」

少し痛い……」

遠慮がちに訴えるが、手を離す勇気が出ない。

「ゴメン、ゴメンな……」

熱いものでぼやける視界の中、無意味に謝罪を繰り返した。

「隊長、泣いてる？」

ボク、何か悪いコトしたの？」

いつもの、少女の冷静な口調に、少しだけ焦りが混ざる。

「ゴメンなさい。」

ボク、何でもするから。

隊長がイヤなら、二度と近づかないから。



だから、ここに居させ……」  
クチュ……。

必死に訴える少女の口を、無理矢理封じ込めた。  
万感の思いを込めて……。

『この子が欲しい』

ただ、その気持ちで一杯だった。

憐憫と愛情と肉欲と同情と独善と打算と独占欲と嫉妬と保護欲と劣情と……。

ごちゃまぜの思いが、理性を封じ込め、肉体に暴走を促した。  
只々、驚く少女の唇を貪る。

クチュ、ピチャツ……。

小さな頭を押さえ付け、細い身体を抱きしめたまま、長々と唇を塞ぎ続けた。

少女の力が抜けるにつれ、舌を挿込み、甘い唾液を啜る。  
興奮と酸欠でブラックアウトする寸前、ようやく解放。

形良い唇から、糸を引くヨダレが、俺の未練をあらわすかのようにだった。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

少女は、荒い息を継ぎながら、それでも俺に……

「ゴメン、隊長。」

心配機能は、鍛えていたはずなのに、脈拍及び血圧上昇、並びに呼吸困難により、意識を混濁させてしまった。」

詫びを入れてきた。

「それと隊長。」

口腔への接触は、衛生上良くない。

僕の口は、排泄に使われるところだったか……、ウムッ」

くだらない発言を封じる。

こんなにも甘く芳しいモノが、汚いはずあるか。  
再び、唇を貪る。

余計な口を利けなくなるまで……。

長い凌辱の後、ようやく拘束から逃れた少女は、力を亡くしたかの  
ように、カクンと首をのけ反らした。

ほっそりとした首筋が美しい。

思わず舌を這わし、タップリ味わった。

そのまま舐め上げ、形良い耳にたどり着く。

「君が欲しい」

「え？」

戸惑いの声を上げる少女。

当たり前だろう。

只の、配属先の上官。

それも、今まで性別すら把握してなかったマヌケがどの口で……。

しかし、俺は本気だった。

本気になってしまった。

愛しているなどは、言えなかった。

この子に、一生を捧げる覚悟はある。

だが、それは代償としてだと思っ。

この子を喰りたいから。

この子の不幸ごと、食らいつくしたくなつたから。  
愛なんて綺麗ごとで、彼女を縛つてはならない。

俺は、この子を幸せに導ける勇者の現れるまで、賤しくねぶり尽くす悪龍だ。

己が内に秘めていた、邪悪な獣を目覚めさせる。

今、この瞬間、恋に落ちた。

今、同時に、狂気に堕ちた。

「アアッ！」

胡座の上の少女。

グダグダと悩み続けていた俺だが、彼女を貫いたまま、抜こうともしていなかった。

賤しくそそり立った醜い欲望で再び、彼女を突き上げる。

「アッ、アクウ……」

苦しげな悲鳴も、俺の耳には届かない。

握り潰さんばかりに締め付ける、彼女の幼いソコ。

すぐにも放出しそうな刺激をやり過ぎすため、未練を残しながらも、一時動きを止めた。

「ア、アアッ……」

苦痛にか、うめきを上げる少女。

耳朶に滲みいるその声に、甘さを感じる賤しい己。

いまさらの醜態を顧みつつ、獣の本性を顕しながら、少女を喰る。

「へ、変だよお、隊長」

苦しい息のなか、少女は切々と訴えた。

無視して抱きしめる。

己が狂気を覚ましたら、身動きが取れなくなるから。

自らの欲望の赴くまま、少女の腔を侵していく。

同時に、口腔を、耳朶を、鼻孔や眼球に至るまで、卑しくなめ回した。

両手も、バラバラの意志を持つ怪物の如く、華奢な身体をまさぐる。

細く芳しい銀髪に、指を絡ませた。

小さな頭骨が愛らしい。

繊細な感触を味わいながら、滑らかな首筋にたどり着く。

小枝のようにホッソリと頼りない。

『……片手でも』

不意に沸き起こる不穏な欲望に怯え、その手を引きはがした。

薄い肩を引き寄せ、小柄な身体を、再度懐に納め直す。

小ぶりの胸の感触が心地好い。

ヒンヤリとした肌を合わせると、小さく打ち続ける鼓動が、俺に伝わってきた。

両の手が、滑らかな背筋を滑り落ち、尖った尻を支える。

愛らしい蕾を指先で擦った。

ビクン！！

蕩けたかのように脱力していた少女の身体が、雷に撃たれたかのように、跳ね上がる。

「……アツ、ダメ、たいちよお、ダ……メエ」  
制止する少女。

しかし、その声音は拒絶ではなく、遠慮だ。

事実、誘うように熱く濡れていた。

……ップ。

「ヒイツ!？」

甘やかな悲鳴。

ごつい男の指を、少女の後口は、柔らかく受け止める。

それに反して、俺の欲棒をくわえ込む膣は、ビクビクと誘うような痙攣を繰り返した。

……クチュクチュ。

「ヒ、ヒヤアアツ……」

増やした指を、それでも容易にのみ込む少女。

そうさせたクズ共を呪いながら、それ以下の存在と成り果てた俺は、彼女を執拗に責め立てる。

滑らかな腸壁を擦り、キツイ中で指を広げ、慎ましくすぼもつとする襞を、外から親指擦った。

「アギイ!ヒギギギギ……」

彼女の口からは、最早、言葉は発せられない。

見開かれた瞳は、ほぼ白目に返り、愛らしい鼻からは、鼻水を垂らし、食いしばった口許からは、

ヨダレどころか、泡を吹いていた。

それでも、彼女は美しい。

賤しい犬の如くなめ回しながら、ぶざまに腰を振りたたてた。

軽い身体を、放り投げるかのように。

落ちる彼女を、刺し貫くかのように。

彼女の中を、突き破るかのように。

吹き出す汚汁で、彼女を満たすかのように……。

パタッ……。

獣の射精に押されたように、少女は石畳に倒れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7747y/>

---

たいせん

2011年11月26日00時56分発行